西俊輔の「毎日楽しく」

Vo1.87　2012年11月号

今年の春に足を骨折し、かなり時間がかかりましたが、最近ようやく松葉杖もはずれまして、現在は普段の歩行をリハビリ代わりにしています。

病気やケガをすると、ふだん健康でいることがどれほどありがたいかがわかる、とはよく言われることですが、私の場合も今回のケガでまさにそういう思いを強くしました。ただ、「塞翁が馬」、あるいは「人間万事塞翁が馬」ということわざにもあるように、何が幸いするかはわかりません。塞翁が馬というのは次のような話です。

昔、ある老人が飼っていた馬が隣国に逃げてしまい、気の毒に思った近所の人が老人をなぐさめますが、老人はそれが不幸なこととは限らないといって少しも残念がる様子がありません。その言葉どおり、逃げた馬は名馬を連れて帰ってきましたので、今度は、近所の人がよかったねと言うと、老人は逆にそれがいいこととは限らないといって少しも喜ぶ様子がありません。そしてまたその言葉どおり、馬に乗った息子が落馬して足を折ってしまいましたので、近所の人はまたなぐさめようとしますが、老人はまたしても、それが不幸なこととは限らないといってやはり残念がる様子がありません。その直後、隣国との戦争が始まり、兵士として招集された多くの若者が命を落とす中、ケガをしていたために兵士として招集されなかった老人の息子は命が助かったという話です。

すなわち、人間の禍福（不幸と幸福）というものは表面上の出来事から単純には判断できないということですが、私の場合もまさにそういう面がありました。上記の、ふだんの健康のありがたみがわかった、ということももちろんそうですが、今回のケガによって出張の回数を減らさざるをえず、日々の仕事をする上で一度立ち止まって考える機会を持つことができました。それによってこれまで見えなかったものが見えるようになった部分もあり、ケガをしないままこれまでどおりにすすめていたら、大きな問題に発展していたかもしれないと思うことがいくつかありました。

一見、不幸と思われる出来事の中にも、貴重な気づきや学びってけっこうあるものですよね。